



お月見集会

名月や 池をめぐる夜もすがら 松尾芭蕉

御存知、芭蕉の句であります。

「中秋の名月の夜、池の水面に映る月に感動し、池の周りをそぞろ歩いて趣を楽しんでいたら、いつのまにか夜が明けてしまった」

というのが、普通の解釈なのだと思いますが、旅をしている芭蕉が昼だけでなく夜も歩くとは考えられない、ということで、

「たたずむ芭蕉の頭上を、中秋の名月が池の周りをめぐっていき、その美しさに感動しているといつの間にか夜が明けてしまっていた」

と解釈した方がよいのではないかという説もあるようです。

私としては、どちらでもよく、私的に、この句がすてきなあとと思うのは、「夜もすがら」という日本語の響き、そして、頭上に輝く月と池に映る月のコントラストの二つではないのかなあと考えています。

さて、平安時代に中国から伝わり貴族の間で流行した「お月見」は、江戸時代には庶民に広がり、今に至ります。しかしながら、いかがでしょうか。今の日本、どのくらいの家庭でお団子やすすきを準備して十五夜お月様を拝んでいるのでしょうか。日本のお月見文化は、動植物に例えるならば絶滅危惧種になりつつあるのではないのでしょうか。

先の松尾芭蕉ではありませんが、月を愛でるといふ日本人としての感覚、アイデンティティは大事にしていきたく、ここ補習校においては続けていきたい行事です。

集会では、日本古来の楽器である琴や尺八のBGMによる朗読が「日本人会・箏の会」のご協力によって行われました。プロジェクターに映された場面絵を見ながら琴や尺八の演奏を聴いていたら、昔テレビで放映されていた日本昔話をライブで見ている錯覚に陥りました。

私があればこれ語るよりも、子どもたちの感想がどんなによい会であったかを物語っていますので紹介します。箏の会の皆様をはじめボランティアいただいた保護者の皆様に感謝申し上げます。



荒城の月の歌詞説明(中3)

プログラム

第1部	第2部	第3部
小6・中学部 (92名)	小3・小4・小5 (114名)	小1・小2 (119名)
校長の話		
題「仙台(土井晩翠)の話」	題「月の模様は何に見える」	題「お月見ってなあに」
日本人会「箏の会」による演奏とお話:「もちもちの木」		
歌「荒城の月」	歌「証城寺の狸囃子」	歌「月」

箏の会の皆様、モチモチの木の琴の演奏をぼくたちに聴かせてくださりありがとうございます。一人でモチモチの木を音読するよりもいっぱいリズムがあってとても楽しかったです。ぼくが一番心に残ったところは、豆太がおじいちゃんを助けるために一人でケガをしながら医者様を呼びに行ったところです。豆太が山を走り下りている時は琴の音が大きくなったり速くなったりして、おじいちゃんがよくなって豆太が安心したときは音がゆっくりおだやかになって、豆太の気持ちがすごくよく分かりました。来年も琴の演奏を聴きたいと思いました。

(小学部3年 宗岡拓実)

箏の会の皆様、先週は補習校に来てくださってありがとうございます。私は小学1年生から補習校にいますので、琴の演奏を聴くのは今年で4回目になります。毎年ちがうお話を選んでくださるところが私の一番楽しみにしているところです。今年選ばれた作品は「モチモチの木」で、これは私の思い出の本です。2歳の時にお母さんが私に読み聞かせをしてくださいました。その後、小学3年生の教科書でも読んだので、小さいころを思い出しました。箏の会の演奏を聴くと、昔の日本の風景が浮かびました。特に、尺八の音にそう感じました。本当にすてきでした。来年も楽しみにしています。



小学部3～5年生

(小学部4年 横川珠奈美)

先週はお忙しいところ、私たちのお月見集会のために演奏をしていただきありがとうございました。皆様にすてきな演奏をしていただき、楽しく過ごすことができました。琴は、おしとやかで美しい音色だけを出すものと思っておりましたが、「モチモチの木」で豆太が一人で外に行き医者を探す場面では力強い音色に圧倒されました。琴の演奏を聴き、いろんな音を出せる琴、そして琴の奥深い音色に魅了されました。琴の音色を通して、演奏して下さった皆様と心を通わせることができ、大変うれしかったです。シンガポールで暮らしていて日本の文化や楽器と触れ合う機会が少ないので、貴重な体験をさせていただきました。本当にありがとうございました。

(中学部2年 山岸杏名)

※ 平仮名で書かれたものを一部漢字表記等に直しています。



小学部1～2年生



「箏の会」の皆様による演奏と朗読